

英国大使館
旧蔵
外国事務老中書翰
(一)

解説

洞 富 雄

編集

柴 田 光 彦

解 説

昭和二十六年、といえども連合軍の占領中で、英国大使館は英国代表部といっていた当時であるが、この年、同代表部から夥しい数量の保存資料が紙屑屋に払下げられたことがある。そのなかに安政六年の開港当初から明治初年までのあいだに、幕府や明治政府の外交当局者が駐日英国公使やその属僚におくった邦文書翰の原本があった。この貴重な資料は亡佚の寸前、危うく救われて、別れ別れに東京大学法学部と早稲田大学図書館の有に帰したのであるが、この収書綺譚については、館員故池田政敏君がその年の十二月に出た『早稲田大学図書館月報』の第六号に詳しく書きのこしてくれている。

この外交文書は、年次別に文書番号をつけ、十数通ずつ法帖仕立てに整理してあり、その表紙には杉板がつかわれている。当初、東大の手にはいったものが一二九帖、本館の有に帰したものが七九帖であった。(本館では封筒にはいつていた一通を一帖に数えて、全部で八〇帖としていたが、後にこれを該当する帖に貼りこんだので、入手当初の帖数は七九帖ということになる)両者をあわせて大小二〇八帖になるが、双方をつきあわせると、なお一〇帖ちかい欠脱のあることに気づいたので、これらの欠脱分はどこかに散逸しているにちがいないと、その探索に心がけていたところ、幸いにその後、東大で二帖を発見し、本館でもまた新

たに一帖を加える機会にめぐまれた。本館分の一帖は、昨年、館員田口親君が神田の井上美術部階上の美術品交換会場から掘り出したものである。

英国大使館では、これらの文書を From Ministers と Enclosures と From Governors, etc. の三部にわけて整理しており、表紙の題箋には、それぞれの帖番号 (Volume Number) がつけられ、年次・月・文書番号が記されている。

From Ministers とある第一類のものは、三八種に九種の大型帖で、これには Minister すなわち幕府の老中(外国掛)からの書翰が収められている。老中の書翰は、第一一三帖と、それにつづく帖番号なしの七帖、計三八帖のうち、まだ行方不明の第二一・二三帖を除いて、すべて本館の収蔵に帰している。これは日本が貿易を開始した一八五九年(安政六)の七月から一八六六年(慶応二)の三月まで、約七ヵ月にわたる文書である。

Enclosures とある第二類のものは、二〇種に九種の小型帖で、第一類の老中書翰の附属同封文書を収めたものである。両大学に収蔵されている、この第二類のものは一四帖であるが、うち一二帖は東大の、二帖は本館の収蔵となっている。東大本は、この Enclosures とあるものも、次にいうこれと同じ小型の From Governors, etc. とあるものも、その多くが、種別とそれぞれの帖番号を記した題箋のはってある杉板表紙がとりさられていたからか、両者を区別せずに整理されている。Enclosures は双方の分をあわせて、第四一―一四帖の順序・番号は明らかであるが、年次的に第四帖以前のものと、帖番号の不明なものが三帖ある。これらは第一―三帖にあたるものと推定される。

第三類の From Governors, etc. とあるものは、Governor すなわち奉行(外国奉行・神奈川奉行等)からの書翰を収めたものである。これは第一一三・五(以上推定)・六―二〇帖と、年次的にそれにつづく、帖番号不明のものあるいは帖番号のないもの一四二帖、計一六一帖が両大学に収蔵されている。うち本館分四二帖、東大分一一九帖。期間は一八六〇年(万延元)三月から一八七三年(明治六)まで約一四ヵ年にわたっている。この類のものでは、第四帖のほか番号不明の分にも二、三帖の行方不明

がある。

文書の種別とその数量は以上のとおりである。当時、日本の当局者が英国の代表におくった書翰は、邦文のものを原本とし、これに蘭訳文、後には英訳文を添える慣例であったが、これらの文書は、大使館に残されていた、その邦文原書翰であって、欧文書翰はたぶん英本国の外務省に送られているものと思われる。

この外交文書は一つのもので二つにわかれて、東大法学部と本館の二カ所に収蔵されることになったのであるから、当然いずれもその一方だけでは不完全であり、両者をあわせて、はじめて史料集として生きてくるわけである。しかし、東大法学部にしても本館にしても、その所有権を相手方に移譲することは實際上、不可能である。そこで、本館では両者をあわせた総合内容表を作成して利用者の便をはかることになり、池田政敏君と元本館員中村尚美君（現本学社会科学研究所員）が東大本の調査に当った。その結果としてできたのが、『早稲田大学図書館月報』第六号に掲載された表である。この表の作成にあたっては、両君はなみなみならぬ苦心をし、私もまた少しばかり助力したが、上述のとおり、東大本の多くには類別とその帖番号を記した題箋のはつてある板表紙が失われていたことと、双方の現物を対照することができなかったことのために、若干の誤りが生じた。その後、史料編纂所のあつせんで東大本のマイクロ・フィルムを入手することができたので、それを整理するにおよんで、はじめてこの誤りに気づいた。それで今回もとの表を補正し、これに新収本の内容を加えて作成したのが、次表である。

なお、東大法学部には、法帖仕立ての原文書のほかに、やはり英国代表部から同時に出たもので、主として明治以後における対日外交関係文書の控類である和装本を多量に収蔵している。この分のマイクロ・フィルムも法帖仕立てのものフィルムと一緒に入手したので、これらに本館分のフィルムをあわせて、大使館旧蔵の日英外交文書全部のフィルムを、一つの請求番号で整理することができた。このマイクロ・フィルムを利用するために作成したものが、内容表に附載した略目録である。

英国大使館蔵 幕末維新対英外交文書原本内容表

(早大本・東大本総合)

○東大本の多くは帖の表紙が失われているため、帖番号の不明なものがある。なお、本来、帖番号を欠くものもある。

○原文書の日付けはいうまでもなく旧暦であるが、本表では英国大使館の新暦による整理にしたがった。

○右端の整理番号のうち、*印を附したものは東大本。

FROM MINISTERS

原 本 帖番号	年	年 次 別 文書番号	月	整理 番号
I	1859(安政6)	6-22	Jul.	(1)
II	1859	23-44	Aug.	(2)
	(Encl. I (?); in 11-26 of 1859)			(*3)
III	1859	45-60	Sep., Oct.	(3)
IV	1859	66-85	Nov.	(4)
V	1859	87-102	Dec.	(5)
VI	1860(万延1)	2-15	Jan.	(6)
VII	1860	16-39	Feb., Mar.	(7)
VIII	1860	41-55	Apr., May	(8)
IX	1860	57-88	Jun.-Aug.	(9)
	(Encl. II (?); in 20-74 of 1860)			(*7)
X	1860	90-105	Sep.-Nov.	(10)

原 本 帖番号	年	年 次 別 文書番号	月	整理 番号
XI	1860	106-126	Dec.	(11)
	(Encl. III(?); in 87,90,107,113 of 1860)			(*9)
XII	1861(文久1)	1-18	Jan., Feb.	(12)
XIII	1861	21-52	Mar.-Jun.	(13)
XIV	1861	53-74	Jul.-Sep.	(14)
	(Encl. IV; in 28-62 of 1861)			(36)
	(Encl. V; in 67-74 of 1861)			(*16)
XV	1861	77-93	Oct.	(14[2])
XVI	1861	89-112	Nov., Dec.	(15)
XVII	1862(文久2)	1-25	Jan., Feb.	(16)
XVIII	1862	27-44	Mar.-May	(17)
XIX	1862	45-77	Jun., Jul.	(18)
	(Encl. VI; in 7,20,35,50, of 1862)			
	(Encl. VII; in 67 of 1862)			
	(Encl. VIII; in 74 of 1862)			
XX	1862	78-103	Aug.	(19)
	(Encl. IX; in 86 of 1862)			(*15)
	(Encl. X; in 90 of 1862)			(*18)
XXI(欠)			
XXII(欠)			
XXIII	1863(文久3)	1-31	Jan.-Mar.	(20)
	(Encl. XI; in 90,110,112,147 of 1862 & 16 of 1863)			(37)
XXIV	1863	35-55	Apr.-Jun.	(21)
XXV	1863	56-84	Jul.-Oct.	(22)
XXVI	1863	86-102	Nov., Dec.	(23)
XXVII	1864(元治1)	1-17	Jan., Feb.	(24)
XXVIII	1864	18-29	Mar.-May	(25)

原 本 帖番号	年	年 次 別 文書番号	月	整理 番号
XXIX	1864	30-46	Jun.-Aug.	(26)
XXX	1864	47-61	Sep., Oct.	(27)
		(Encl. XII; in 7,36,59 of 1864)		(*28)
XXXI	1864	62-78	Nov., Dec.	(28)
		(Encl. XIII; in 72,73a,96 of 1864)		(*29)
		(Encl. XIV; in 74 of 1864)		(*1)
—	1865(慶応1)	1-15	Jan., Feb.	(29)
		(Encl.; in 89 of 1865)		[47]
—	1865	16-36	Feb.-May	(30)
—	1865	37-61	May-Aug.	(31)
—	1865	62-80	Sep.	(32)
—	1865	81-98	Oct., Dec.	(33)
—	1866(慶応2)	1-17	Jan.	(34)
—	1866	18-39	Feb., Mar.	(35)

FROM GOVERNORS, ETC.

原 本 帖番号	年	年 次 別 文書番号	月	整理 番号
I(?)	1859(安政6)	—	Jun.-Aug.	(*2)
II(?)	1859	24-63	Aug.-Sep.	(*4)
III(?)	1859	64-77	Oct.-Dec.	(*5)
VI	……(欠 ?)	—	—	—
V	1860(万延1)	1-31	Jan., Feb.	(*6)
VI	1860	33-48	Mar., Apr.	(38)
VII	1860	56-73	May, Jun.	(39)
VIII	1860	76-89	Jul., Aug.	(40)
IX	1860	95-101	Sep., Oct.	(*新2)

原 本 帖番号	年	年 次 別 文書番号	月	整理 番号
X	1860	102-127	Nov., Dec.	(41)
XI	1861(文久1)	4-32	Jan.-Apr.	(*10)
XII	1861	36-51	Apr.-Jul.	(*11)
XIII	1861	61-91	Aug.-Oct.	(*12)
XIV	1861	92-109	Nov., Dec.	(*13)
XV	1862(文久2)	2-32	Jan.-Apr.	(42)
XVI	1862	46-77	May-Jul.	(43)
XVII	1862	80-96	Aug., Sep.	(44)
XVIII	1862	100-127	Sep., Nov.	(45)
XIX	1862	129-153	Nov., Dec.	(46)
XX	1863(文久3)	2-28	Jan.-Mar.	(*19)
—	……(欠 ?)	—	—	—
—	1863	38-63	May, Jun.	(*20)
—	Satsuma Correspondence	Aug.		(*21)
—	1863	66-77	Aug., Sep.	(*22)
—	1863	82-96	Oct.-Dec.	(*23)
—	1864(元治1)	—	Feb.-May	(*24)
—	1864	—	May-Sep.	(*25)
—	1864	—	Jul.	(*26)
—	1864	—	Aug.-Dec.	(*27)
—	1865(慶応1)	2,9 & Encl.; in 89 of 1865		
—		Jan.		(47)
—	1865	1-41	Jan.-May	(*30)
—	1865	42-79	—	(48)
—	1865	82-99	—	(49)
—	1866(慶応2)	2-31	Jan.-Mar.	(50)
—	1866	32-39	Apr.	(51)

原 本 帖番号	年	年 次 別 文書番号	月	整理 番号
—	1866	48-60	Jun.	(52)
—	1866	60a	Jul.	(*31)
—	1866	—	Jul.	(*32)
—	1866	—	Jul., Aug.	(*33)
—	1866	—	Aug.	(*34)
—	1866	—	Sep.	(*35)
—	1866	—	Oct.	(*36)
—	1866	—	Nov.	(*37)
—	1866	—	Nov.	(*38)
—	1866	—	Nov.	(*39)
—	1866	—	Dec.	(*40)
—	1867(慶応3)	—	Jan.(上・下)	(53,54)
—	1867	—	Feb.(上・中)	(55,56)
—	1867	—	Feb.(下)	(*新1)
—	1867	—	Mar.(上)	(57)
—	1867	—	Mar.(下)	(*41)
—	1867	—	Apr.	(*42)
—	1867	—	May	(*43)
—	1867	—	Jun.	(*44)
—	1867	—	Jul.	(*45)
—	1867	—	Aug.	(*46)
—	1867	—	Sep.	(*47)
—	1867	—	Oct.(下-上の誤?)	(58)
—	1867	—	Oct.(上-下の誤?)	(*48)
—	1867	—	Nov.(1-4)	(59-62)
—	1867	—	Dec.(上・中・下)	(63-65)

原 本 帖番号	年	年 次 別 文書番号	月	整理 番号
—	1868(慶応4)	—	Jan.(上)	(*49)
—(欠)	—	—	—
—	1868	—	Feb.	(*50)
—	1868	—	Mar.(上・下)	(*51,52)
—	1868	—	Apr. May	(*53)
—	1868	—	Jun.(上)	(66)
—	1868	—	Jun.(下)	(*54)
—	1868	—	Jul.(上・中・下)	(*55-57)
—	1868	—	Aug.(上)	(*58)
—	1868	—	Aug.(下)	(67)
—	1868	—	Sep.(上・中・下)	(*59,60,62)
—	1868	—	Oct.(上・下)	(*61,63)
—	1868	—	Nov.	(*64)
—	1868	—	Dec.(上・下)	(68,69)
—	1869(明治2)	—	Jan.(1-4)	(*65-68)
—	1869	—	Feb.(上・中・下)	(*69-71)
—	1869	—	Mar.(上・中・下)	(*72-74)
—	1869	—	Apr.(上・中・下)	(*75-77)
—	1869	—	May(上・中)	(70,71)
—	1869	—	May(下)	(*78)
—	1869	—	Jun.(上・中・下)	(*79-81)
—	1869	—	Jul.(上・下)	(*82,83)
—	1869	—	Aug.(上)	(*84)
—	1869	—	Aug.(中・下)	(72,73)
—	1869	—	Sep.	(74)
—	1869	—	Oct.(1-4)	(*85-88)

原 本 帖番号	年	年 次 別 文書番号	月	整理 番号
—	1869	—	Nov.(上)	(*89)
—	1869	—	Nov.(中・下)	(75,76)
—	1869	—	Dec.(上・中・下)	(77-79)
—	1870(明治3)	—	Jan.(上・中・下)	(*90-92)
—	1870	—	Feb.(上・下)	(*93,94)
—	1870	—	Mar.	(*95)
—	1870	—	Apr.(上・下)	(*96,97)
—	1870	—	May	(*98)
—	1870	—	Jun.	(*99)
—	1870	—	Jul.	(*100)
—	1870	—	Aug.(上・中・下)	(*101-103)
—	1870	—	Sep.	(*104)
—	1870	—	Oct.	(*105)
—	1870	—	Nov.(上・下)	(*106,107)
—	1870	—	Dec.	(*108)
—	1871(明治4)	—	Jan.(上・下)	(*109,110)
—	1871	—	Feb.	(*111)
—	1871	—	Mar.(上・中・下)	(*112-114)
—	1871	—	Apr.(上・下)	(*115,116)
—	1871	—	May(上・中・下)	(*117-119)
—	1871	—	Jun.(上・中・下)	(*120-122)
—	1871	—	Jul.(上・下)	(*123,124)
—	1871	—	Aug.(上)	(*125)
—	……(欠)	—	—	—
—	1871	—	Sep.(上・下)	(*126,127)
—	1872(明治5)	—	—	(*128)
—	1873(明治6)	—	—	(*129)

外国事務長官神保

〔附 載〕

早大図書館 収蔵 英国大使館 旧 蔵 日英外交文書目録

○左端の算用数字は現物の整理番号。

○右端の算用数字は本館収蔵マイクロ・フィルムの巻次。

○〔 〕内の数字は現物の冊次の誤りを正したもの。

A 早大収蔵 対英外交文書原本(邦文)

1 ~20	From Ministers	安政6・6・5~文久3・2・13	(1)
21~35	〃	文久3・2・20~慶応2・1・29	(2)
36~37	Enclosures	(〃)
38~40	From Governors, etc.	万延1・2・26~同年7・7(〃)	(〃)
41~60	〃	万延1・9・20~慶応3・10・24	(3)
61~79	〃	慶応3・10・26~明治2・11・28	(4)

B 東大収蔵 対英外交文書原本(邦文)

{1・3・7~ 9・14・15	Enclosures	(5)
{2・4~6・ 10~13	From Governors, etc.	万延1・11・22~文久1・11・19(〃)	(〃)
{16~18・ 28~29	Enclosures	(6)
{19~27・ 30~35	From Governors, etc.	文久2・11・12~慶応2・8・28(〃)	(〃)
36~53	〃	慶応2・8・27~明治1・4	(7)

54~65	From Governrs, etc.	
	明治1・4・26~同年11・29	(8)
66~80	〃	明治1・11・29~同2・5・15 (9)
81~98	〃	明治2・5・16~同3・4・28 (10)
99~116	〃	明治3・5・3~同4・3・18 (11)
117~129	〃	明治4・3・18~同6・6・31 (12)
新収 1	〃	慶応3・1・17~同年1・23 (〃)
〃 2	〃	万延1・7・10~同年9・16 (〃)

C 東大収蔵 対英外交文書写(邦文)

1~6	書翰抜萃	6冊	(安政6・7・18~明治26・10・24) (13)
1	卷一		安政6・7・18~明治5・11・24
2	卷二		安政6・7・10~慶応2・2・28
3	卷三		明治1・閏4・25~同2・11・5
4	卷四甲[卷四乙 と同一内容]		明治16・3・10~同26・10・24
5	卷四甲		明治3・2・25~同6・4・29
6	卷四乙		明治16・3・10~同26・10・24

D 東大収蔵 勅書・布告・条約写(邦文・一部英訳)

1	勅書抄	1冊	(14)
1	御布告鈔	1冊	(〃)
1	御布告勅書鈔	1冊	(〃)
1	Notifications and Proclamations(布告英訳)	1冊	(〃)
1	条約書(安政5年日英修好通商条約・ 慶応2年改税約定)	1冊	(〃)

1	同上	1冊	(14)
1	条約(明治27年日英通商航海条約)	1冊	(〃)

E 東大収蔵 対日外交文書留(邦文)

1~2	書翰案存	2冊	(1867・5・17~1868・11・18) (15)
1	——		1867・12・10~1868・11・18
2	二〔一〕編		1867・5・17~1868・11・5
1~27	庶務書翰留	27冊	(1869・2・27~1898・6・21)(15~17)
1	第一冊		1869・2・27~1870・8・11 [15]
2	第二冊		1870・8・11~1871・3・15 [〃]
3	第三冊		1871・3・15~1871・6・4 [〃]
4	第四〔六〕冊		1872・1・29~1872・7・2 [〃]
5	第五〔四〕冊		1871・6・4~1871・10・26 [〃]
6	第六〔五〕冊		1871・10・26~1872・1・29 [〃]
7	第七冊		1872・7・3~1872・11・22 [〃]
8~16	第八~一六冊		1872・11・29~1875・1・27 [16]
17~27	第一七~二七冊		1875・1・27~1898・6・21 [17]
1~7	無翻訳書翰留	7冊	(1870・11・9~1878・2・2) (18)
1	卷一		1870・11・9~1872・1・30
2	卷三〔二〕		1872・1・31~1872・7・29
3	卷四〔三〕		1872・7・30~1873・3・18
4	卷五〔四〕		1873・3・27~1873・8・30
5	卷六〔五〕		1873・9・6~1873・12・5
6	——		1874・12・8~1876・7・11
7	——		1876・8・9~1878・2・2
1~6	書記官書翰留	6冊	(1878・2・8~1908・11・4) (19)
1~5	雜書翻譯文留	5冊	(1870~1879) (20)

最後に、対英外交文書原本の価値について一言ふれておきたい。

自由貿易主義を標榜し、その市場を求めて東洋に進出してきた欧米資本主義諸国にとって、かれらの企図する世界市場完成のための、最後の一環として取りのこされていたのが日本であった。それで、一八四〇、五〇年代、中国貿易において猛烈なせりあいをしていった英米両国のいづれかによって、早晩、日本の開国は強要されるであろう情勢にあった。米国は、一八五四年（安政元）日本の開国に先鞭をつけ、また通商条約を締結したのも彼らが最初であったが、それから間もなく一八六一年（文久元）におこつて、一八六五年（慶応元）までつづいた内乱（南北戦争）のために、しばらくその極東政策の鋭鋒をおさめざるをえなかった。

これに乗じて、日本の市場を独占したのが英国である。英国は日本の開国には米国に一手おくれをとつたが、安政六年の開港当初から、貿易上においては圧倒的に優越な地位を保持し、米国が極東の市場から後退して後の日本貿易は、その独壇場となった。たとえば一八六五年の横浜港の貿易においては、英国の貿易額は全体の八六％を占め、これに対して米国のそれはわずか一二・五％にすぎなかった。

こうした背景のもとに、英国は日本に対して積極的な外交政策をとるにいたり、帝国主義的振舞さえもあえて辞さなかった。たとえば、生麦事件においては、下手人である薩藩に対して二五、〇〇〇ポンドの賠償金を要求する一方、この事件に対する処置が無責任だといって、幕府に一〇〇、〇〇〇ポンドの罰金を要求する最後通牒をつきつけたり、要求を拒否した薩藩に対しては鹿児島を砲撃したり、馬関海峡の通航を武力で阻止した長州藩に対しては、米・仏・蘭三国を誘つて下関を砲撃したり、またフランスとともに幕府に強要して横浜防衛権を移譲せしめ、横浜居留地保護の名のもとに居留民に一〇倍する軍隊を陸上に駐屯せしめたりしている。

このように、欧米諸国の対日外交において、そのイニシアチヴをとつたのが英国である。こうした英国に対する日本側の交渉史料をほとんど網羅しているのが、本文書集である。しかも、それは原本であるということに、非常な貴重性をもつと同時に、またはなほだ珍稀性もあるわけである。加えるにまた、その大部分は未公開の史料でもある。この文書集が幕末外交史研究上の重

要資料として、その価値を高く評価されるいわれはここにある。

幕末外交史料の集成としては、幕府による『通信全覧』（安政六年・万延元年の分。編年一六八冊・類輯一四六冊・安政六年欧文来翰六冊。内、類輯は除き、英国関係のものは、英国御書翰二九冊・英国書翰八冊・英国御対話一一冊・英国対話一二冊・英国来翰〔英文〕五冊）と、外務省による『統通信全覧』（万延二年〔文久元年〕—慶応四年の分。編年五〇〇冊・類輯一三六六冊。内、類輯は除き、英国関係のものは、英国往復書翰一二五冊）が編纂されており、これらは外務省に収蔵されている。なお内閣文庫には正編の初・二編（編年・類輯共）が、また東京都政史料館には正編の二編（編年・類輯共）の一部が架蔵されている。戦時中、維新史学会が、この『統通信全覧類輯』をもとにして、それに足りない部分を『通信全覧類輯』から補い、『幕末維新外交史料集成』と題して公刊に着手したが、これは第六冊まで、礼儀・礼典・慶弔・宗教・修好の五部門を出したままで中止され、重要な部門は未刊におわった。このほかに、史料編纂所の『大日本古文書』の幕末外国関係文書（既刊二九冊）や、維新史料編纂所の『大日本維新史料』などが刊行されているが、これらも、前者はまだ嘉永三年（一八五〇）六月から安政六年（一八五九）十一月までの分が刊出されているにすぎないし、後者は開国以後では、安政元年（一八五四）—三月、安政五年（一八五八）—五月の分を出したまま公刊が中止されているという状態である。

（洞 富 雄 記）

たまたま本館館員の有志が集って、この外交文書原本解説の会をおこし、本年二月にはじまり六月に至って一応、館蔵分のすべてを解説しおえた。はからずも『紀要』発刊の機会を迎えたので、この未発表の貴重なる史料を本誌上に逐次、翻刻してその紹介をこころみることとした。

凡 例

一、本文書の復刻にあたっては、『大日本古文書』の幕末外国関係文書との重複をさけるため、安政七年（万延元年）一月分より収載することにした。同書は昭和二十七年復刊以来、今日までに七冊刊行され、安政六年十一月十五日分におよんでいるが、同年分が完結するのはまだ数年先のことと思われるので、とりあえず、安政七年一月以降の老中書翰の原本を復刻することにした。

一、原文書は失われていても、その控が『通信全覧』に収録されているものがあれば、史料集としての完璧を期するため、これも収載することにした。

一、文書排列の順序は、本館蔵の老中書翰原本を中心とする関係から、往翰・返翰の如何を問わず、最初に本文書をかかげて後に『通信全覧』編年之部収録の関係文書をならべた。

一、老中書翰を英国公使館において英訳したもの、また英国公使の英文書翰（原本はすべて失われたもののように、写しも安政六年の分が『通信全覧』に欧文来翰として収録されているだけである）で、ブルー・ブックに掲載されているものがあれば、それをも原文書もしくは来翰邦訳文の次に載せた。

一、原文書には、英国公使館において附した整理番号（年度別）があるが、これは、各文書の要旨の下に、「」を加えて注記した。番号はまま飛んでいる場合もあるが、これは、後に帖仕立てにした際に失われていたものがあつたからであらう。

一、各文書の要旨は、『通信全覧』のそれを流用し、原本のみあつて同書に遺漏分は、便宜上、当館において要旨を附し、これを区別するため「」をもって囲んだ。

一、老中文書中、（ ）を附して傍記したのは外務省本『通信全覧』（編年）との異同である。関係文書は外務省本『通信全覧』を底本とし、内閣文庫本との大きな異同のみを傍示した。

一、変体仮名はこれを平仮名に改め、平仮名と片仮名の混用は原文のままとした。

一、原本解説は館員有志によっておこなわれ、校合・編集は館員柴田光彦がこれに当った。

目次

安政七年（一八六〇）

- (1) 開歲之祝詞申出る書翰（西一月三日）〔一〇〕、右御返翰（西二月十四日）〔十六〕
- (2) 筑前平戸等之石炭礦を検査せしめ度旨云々申出る書翰（西一月二八日）〔二〕、右御返翰（西二月十五日）〔十七〕
- (3) 金貨相場引上之儀ニ付被遣候御書翰（西二月二日）〔二十〕、附金貨相場御觸寫
- (4) 安藤對馬守殿外國事務之職掌被命候吹聽御書翰（西二月二日）〔二十三〕
- (5) 通詞傳吉殺害請候旨申出ル書翰（西一月二九日）〔一二〕、右御返翰（西二月三日）〔二十四〕〔附同英文〕
- (6) 〔瑞西白耳義兩國條約爲取替の請あるに付申越書翰の御返翰〕（西二月二九日）〔二十五〕
- (7) 外國船之不開港場繫泊之儀ニ付仰遣候御書翰（西二月一八日）〔二十六〕、但返翰無之
- (8) ホーハタン船は多分之御引替有之候旨苦情申出る書翰三通（西一月三〇日・二月八日・二二日）〔二四・一八・二〇〕、右御返翰（西二月一八日）〔廿九〕
- (9) 御國商人より鐵砲買入之儀ニ付差出候書翰（西一月十五日）〔九〕、右御返翰（西三月二日）〔廿九〕
- (10) 國書差出方之儀ニ付御逢願出ル書翰（西二月二日）〔二三〕、右御返翰（西二月三日）〔卅〕、并再返翰（西二月四日）〔二四〕
- (11) 御逢之儀ニ付被差遣候御書翰（西二月八日）、但返翰無之
- (12) 附添人之義ニ付佛公使ヨリ之書翰（西一月二〇日）添差出候書翰（西二月六日）、右御返翰（西二月廿七日）〔三十四〕

英國大使館
舊藏

外國事務老中書翰

安政七年(一八六〇)

(1) 開歲之祝詞申出る書翰(西一月二三日
舊正月一日)

「(10)、右御返翰(西正月十四日
舊二月五日)」(十六)

大貌利太尼亞全權兼コンシユルセ子ラール(ナシ)

エキセルレンシー

ルーセルフラール(ホ)アールコツク(ト)に

貴國第一月廿三日之書翰落手披見せり本日ハ我國新年の(は)
第一日なるにより我ために幸福を賀し數歳の保運祝され(カ)
余が當日多忙なるを察せられ問ハれんことを止められた(ナシ)
る段其心入淺からず厚意忝存候右答書如斯候拜具謹言(事)

安政七年(年中)正月十四日

脇坂中務大輔(ナシ、以下同
花押)

申正月朔日差出〔通信全覽二編英國往復御書翰壹番〕
第十号

日本に於而貌利太泥亜女王の全權兼コンシユル
セ子ラール、ルーセルフォルトアールコツク

外國事務宰相閣下に

六十年第一月廿三日江戸に於而貌利太尼亞コン
シユルセ子ラール館

今日日本新年の初日なるを以て吾れ閣下に幸福を賀し數
歳の保運を祝す

吾れ閣下に參謁し前條を賀せん事を得は歡喜也然れとも
閣下當日繁劇なる事を吾れ傳聞せり恭敬白

日本在留ハレママイエステイトの全權兼

コンシユルセ子ラール

ルーセルホルトアールコツク 手記

ブレッキマン 翻譯

(2) 筑前平戸等之石炭礦を検査せしめ度旨

申出る書翰(西一月二八日
舊正月六日)「(11)、右御返

翰^(舊) 正月十五日
西二月六日〔十七〕

大貌利太尼亞全權兼コンシユルゼ子ラー

エキセルレンシー

ルーセルフ^(ホ)ラールトアールコックに

貴國第一月廿八日之書翰落手披見せり^(其)その海軍提督より

石炭採集のため軍艦及ひ鉄長を遣わし我國筑前平戸等に

ある坑を検査せしめ度段其許より申入らるゝ趣委細領承

せり右は遠路懸隔之處にて取調方も急々^(ハ)にハ行届間敷且^(間)

品々差障の儀もあれハ求に應ずる事如何あるべき哉然る

にその軍艦と其人とを留めおかれん事尤安からすおもふ^(思)

所なれハ夫是に拘りなく出帆有之候様存候尤委細之儀は

追而取しらへ次第可申入候差急かるゝ趣なれハ不取敢答^(調)

書如斯候拜具謹言

安政七申年正月十五日

脇坂中務大輔(花押)

第二号

日本在留ハレブリタニヤマリーエステイトの

全權兼コンシユルゼ子ラー、リュッテルホル

ドアールコック

外國事務宰相台下に呈す

千八百六十年第一月二十八日江戸ブリタニヤコン

シユルセネラール館ニ而

レーボック^船と名くる蒸氣軍艦我水軍提督の命に因て漢

土より至れり船中に王家の鉄長ヒンテナントマールコ

ルム乗り組來ル是れ近ツク夏月の間に我軍艦ニ石炭を集

め積んと欲する意なり

當時日本にて堀り取る石炭は蒸氣船に佳ならず且其量少

なし故に其質の佳なるを見出し夏月の間に多く堀り取る

の手段を穿鑿せん事を欲す

此標的の爲めに我か王家の鉄長(若し有用の時には)供

用にせんか爲に命を蒙り彼長崎に居りて石炭を軍艦に運

送し而して思へらく其處置は全く政府に關係すと且其近

部にある大名其石炭を堀り取ること饒多なりといへとも

長崎奉行へ運送するハ甚少なし

故に彼余に就て其事を議せんか爲に來れり良キ石炭礦は平戸筑前にあり若し練磨の鉄人をして其礦を（石炭礦）検査せしむる時は彼者蒸氣船に用て佳なる石炭を見出し而して其費多からずして佳なる石炭を得るの手段を教ゆべし

彼マールコルム長崎奉行に近部にある諸礦を見ん事を問ひしに奉行答て曰く是れを江戸に達して其命を得るに非ざれハ能ハすと故に長官時日を費さす速に此地に來れり余今ヒーンテナントマールコルムに有名の石炭礦を検査せしむる事を台下に伏して請ふ但し平戸及び筑前の礦なり

余平戸筑前の石炭礦は政府の有に非ず是れ其地の大名の礦たる事を甚た能知れり然れとも検査するに於る如キは大君政府の嚴なる命令にある事なり其他ヒーンテナントマールコルム其地の諸侯練磨の鉄人を喜ひ容れる事を知れり然れとも

大君の規律に障りある事をも亦知れり

余今我水軍提督蒸氣軍艦を漢土より長官とともに送り來たすは是れ一大重事たると思ふといへとも夫を台下に説くハ緊要の事には非ず余懇切の意を以て台下に事を打明す夫條約を取り極めしは中道にして故障の起り生せんか爲なり此土地の検査は條約中に書き載て非ざるを以ての故に夫を言として斷らん事を思ふか故なり

台下政治及び商用の交の根本を爲す爲めに兩國の間に取り極めし條約を知らざる事不可有夫レ言ひ固めしてある時は細小の事は（親睦を破らざる如キ）若新なる缺乏并に新なる事にして意に肯んせすとも容易く許容し給ふべし何となれハ此度の事ハ曉と治定してあらざるか故に唯一書牘の上にて職業の爲めと見なして給わるべし必ず互に人民の爲に條約したる條約の上にての議論を爲し給わらざるべし

余此に書き添へて之を告く日本に於る如く他國と新ニ關係するに就て生ずる諸種の困難事は久しく捨て置く事能わす然れとも政府に對して少しも困難の事を言わざる是政府に和親結好の誠意なり

ヒーンテナントマールコルムの乗り組ミ来る軍艦と他の二船と共に猶豫する事能わす故に余祝日といへとも台 downstream 速に返答を爲し給わらん事を希ふ敬白

日本在留ハレーブリタニヤマリーエステイ

トの全權兼コンシユルゼ子ラール

リュテルホルトアールコック 手記

外國事務宰相台下に呈す

ハレーブリタニヤマリーエステイトのワイ

スコンシユル

ル ユースデン 譯

(3) 金貨相場引上之儀ニ付被遣候御書翰

(舊) 正月廿一日 (西) 二月一日 (二十)、附金貨相場御觸寫

(ナシ)

大貌利太尼亞全權兼コンシユルセ子ラール

エキセルレンシー

ルーセルフアールトアールコックに (ホ)

以書翰申入候金貨相場引上之儀ニ付追々談判および候ニ付 (及)

此度商議之上別紙相場之通相觸候間此段申入候拜具謹言 (一)
安政七申年正月廿日 (年中)

脇坂中務大輔 (花押)

〔同封文書―通信全覽二編英國往復御書翰六番〕

一 保字小判一枚 金三兩壹分貳朱

一 同壹分判 同三分貳朱 (壹)

一 正字小判一枚 同貳兩貳分三朱

一 同壹分判 同貳分三朱

右之通相觸候事

(4) 安藤對馬守殿外國事務之職掌被命候吹

聽御書翰 (舊) 正月廿二日 (西) 二月一三日 (二十三)

(ナシ)

大貌利太尼亞全權兼コンシユルセ子ラール

エキセルレンシー

ルーセルフアールトアールコックに (ホ)

以書翰申入候老中安藤對馬守今度外國事務之職掌を命せ (殿)

られ以後我と共に諸事取扱へき間此段爲心得申進候拜具
(可) (ナシ)
謹言

安政七申年正月廿二日
(年中)

脇坂中務大輔(花押)

(5) 通詞傳吉殺害請候旨申出ル書翰(西) 正一

月二九日) (二二)、右御返翰(舊) 正月二日)
月七日) (二十四)〔附同英文〕 二月十三日)

(ナシ)
大貌利太尼亞全權兼コンシユルセ子ラー

エキセルレンシー

ルーセルフワールトアールコックに

貴國第一月廿九日附第十二号之書翰落手披見せり其夜五
時頃其許召使へれし傳吉儀殺害およはれし段氣之毒之至
我におゐても憂る所なり右殺害及び逃去しものへ穿鑿方
手配等其筋之役々に嚴敷命し其宿寺門番人を初メ手懸り
に可成ものは速に吟味に及び且其許小紙に記し差越れし
名前之ものハ探索方之者に夫々申達し置ぬ答書如此候拜
(ナシ) (ハ) (英) (共) (所) (憂) (者) (ハ) (毒) (穿) (鑿) (方)

外国事務老中書翰

具謹言

安政七申年正月廿八日
(年中)

脇坂中務大輔(花押)

安藤對馬守(花押)

The Japanese Ministers for Foreign Affairs
to Mr. Alcock. (Despatches from Mr. Alcock.
Her Majesty's Envoy Extraordinary and Mini-
ster Plenipotentiary in Japan. Presented to
both Houses of Parliament by Command of
Her Majesty. 1860. p. 5.)

(Translation.)

We acknowledge the receipt of your letter of
the 29th January. Its contents, referring to
the murder that evening at 5 o'clock of your
servant, Dan Kirche, has caused us great and
intense sorrow. We immediately gave orders
to the proper officials to try and find the
murderer, who had taken to flight, and also
to examine strictly your gatekeeper and the
persons whom you supposed could give a clue
to the individual in question; we likewise gave

the name of the person mentioned in the slip
of paper to the police.

With respect and consideration.

28th day of 1st month of 7th year of Ansei
Saroo (19th February, 1860).

(Signed)

WAKISAKA NAKATSKASANO TAJU.

ANDO TOOSIMANO KAMI.

申正月八日差出〔通信全覽二編英國往復御書翰三番〕

第十二号

日本在留ハレブリタニヤマリーエステイトの

全權兼コンシュルセ子ラル、ルーセルホール

ドアールコック

外國事務宰相

脇坂中務大輔^に呈す

千八百六十年第一月二十九日江戸ブリタニヤコ

ンシュルセ子ラル館ニ而

今晚五時の頃コンシュルセ子ラル館に召使へる通詞日
本産のデンキレツケ死去して我居に送られたり此者コン

シュルゼ子ラル館の門前に而劔を以て身を貫キ直に死
したり○是外國人及び其召使のもの共六ヶ月の間に在り
し第三回の殺害なり其第一回は魯西亞のオヒシール一
人水夫二人第二回ニは佛蘭西のコンシュルエゼントの召
使（支那人）一人第三回即今度は我使臣館の最有用なる
召使の者殺害せられたり○初めの兩回は

大君の政府にていまた其兇人を搜捕する事もなく之を刑
する事もなし○余其時既に台下に告ぐる事あり其罪人を
罰せざるハ他の惡人に賞を與へて更に惡事を爲さしむる
に異ならずと○數々殺害あるに之を罰する事なく其儘差
置く地に於ては人の生命安全ならず又外國政府の名代な
るもの安穩に居住する能はざる地には條約にて取極めた
る事件も永く之を保護する能わす○故に後來の可否を決
するハ

大君政府に於て今度卑怯なる殺害（白日にブリタニヤの
名代の門前に於て爲せり）の處置如何にあり○政府に於
て直ちに兇人を捕へ之を誅戮すれハ後來余及び余か屬官
の生命に於て稍安穩を生する程の満足を爲さしむべし又

政府に於て我等第一回の悪人の禍に遭ふを棄置くや否も此度の處置にて明白なるへし但し其悪人は殺害を好めるものなり

此コンシュル館に屬せる役人は殺されたる死人を其場所より送り來れる人より穿鑿の手掛りを得て必ず之を上告するなるべし○其戸外にデンの居りし家の人は只何人か其助を爲し何人は其證人なる事を言ふべく又總ての様子にて考ふるに其人恐らく其殺害せる人をも知り其殺さるゝも見たるべし門番もこれと同様なり此諸人は直ちに嚴重に吟味するを要す

二日前にデンが馬に乗たるに酩酊せる大名の士官一人之に手向ひしたり余か指揮にて町役人之を捕たれとも其士人大に役人を恐嚇し終に逃れ去りデンを怨みて脅せり○此殺害は其人ならんと疑ひ思ふか當然なれハ先ッ直ちに之を搜捕するを要す其姓名ハ此に封入せる小紙に記せり殺害人の劔は予之を收め置けり

此哀むべき事件は役人より外國奉行へ直ちに告知せり然れとも余速に此事体を台下に上告し彼兇人を搜捕する爲

外國事務老中書翰

め嚴密なる處置を爲し給わんことを勸む恐惶敬白

日本在留ハーレブリタニヤマリーエステイト
の全權兼コンシュルゼ子ラール

ルーセルホールドアールコック
ハーレブリタニヤマリーエステイトのヒセ
コンシュル

外國事務宰相に呈す

エル ユースデン

Mr. Alcock to the Japanese Minister for Foreign Affairs. (Despatches from Mr. Alcock, Her Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary in Japan. 1860. p. 4.)

Yedo, January 29, 1860.

At 5 o'clock this evening the linguist of the Consulate-General, Dan Kirche, a Japanese by birth, was brought home dying, having been stabbed through the body while standing near the gate of the Consulate-General. He died almost immediately. This is the third assassination in six months, either of foreigners or

the servants attached to them. In the first, a Russian officer and two sailors fell victims; in the second, the Chinese servant of the French Consular Agent at Kanagawa was killed; and now the third is a most valuable servant of this establishment. In the two former cases, the Government of the Tycoon has neither traced the assassin nor inflicted any punishment. I have already had occasion to tell your Excellency that impunity is a premium to offenders to commit more crimes. There can be no security to life in a country where a succession of such murders pass unpunished. And where Diplomatic Representatives of Foreign Powers cannot reside in security, no Treaty relations can be permanently maintained. It remains, therefore, for the Government of the Tycoon, by their action in the present, and third, case of a foul murder in open daylight, at the gates of the British Representative to determine what shall be the future relations; whether such satisfaction shall be given, in the immediate apprehension and speedy Punishment of the assassin, as shall yield some assurance of future security

to myself and colleagues, or they will virtually declare that we are at the mercy of the first miscreant who desires to commit a murder.

The yaconins attached to this Consulate have, no doubt, the means of giving your Excellency information derived from the people who brought the dying man from the spot where he was murdered. The Governors of Foreign Affairs were immediately informed of the event by the yaconins, but I hasten to acquaint your Excellency myself with the facts, and urge you to spare no efforts, and lose no time, in taking the most decisive measures for the discovery and arrest of the murderer.

The people of the house at the door of which he was standing must not only be able to give information as to who were the bystanders and witnesses, but, in all probability, know, and must have seen, the assassin commit the act. The gatekeeper also. All those should be instantly and rigorously examined. Only two or three days ago a Damio's officer who was intoxicated, assaulted the deceased, who was on horseback, and, on being made a prisoner at my order by the yaconins, he alarmed them by his violence,

and they let him go. He threatened the deceased with vengeance. This man ought to be made immediately to appear, for suspicion naturally rests upon him; his name is on the inclosed slip of paper. The sword of the murderer is in my possession.

With respect and consideration.

(Signed) RUTHERFORD ALCOCK

(6) [瑞西白耳義兩國條約爲取替の請あるに付

申越書翰の御返翰](舊正月廿八日)「二十五」
(西二月一九日)

大貌利太尼亞全權兼コンシユルセ子ラー

エキセルレンシー

ルーセルフワールトアールコックに

貴國第一月十四日の書翰落手披見せり頃日瑞西并白耳義の兩國より條約爲取替の請ありしといへとも我國におゐて交易の事いまた馴致せず所置の際差支ふる條件少からざるにより當今の處斷りにおよひぬ然るに孛漏生并其他諸國よりも猶同様の請あるへき趣により方今世界の形勢

外国事務老中書翰

事情を懇説し各國の求に應じて條約を結び其事件を實地に行ふの期を延さむにハ彼の望と我思ふ所と兩ながら全くして互に害ある事なかるへきとのよし我爲に縷々忠告せらるゝ段厚意の至なり曩に瑞西國使節へ斷しも行末とも斷およへるにはあらず人慣事熟し產物も饒に成りし頃ハ固より請に應ずる含なれとも今俄に請に應ずる事は情おゐて不好にハあらされとも左ある時ハ反て後の約を違ん事をおそれ爾ハいふなり日を追月を重ね吾國貿易の道に熟達し他の國々へもゆるす事あらん節は白耳義國へもゆるすへきハ勿論たるへし當今の處ハ無余儀事情諒察せられ白耳義國へも其許より前の旨趣を通し給はんことを欲する也答書を兼此事を申入るゝなり拜具謹言

安政七申年正月廿八日

脇坂中務大輔(花 押)

安藤對馬守(花 押)

(7) 外國船之不開港場繫泊之儀ニ付仰遣候御

書翰(旧正月廿八日)「二十六」、但返翰無之
(二月一九日)

大貌利太尼亞全權兼(ミ)コンシユルセ子(ト)ラー(ル)ル

エキセルレンシー

ルーセルフワールトアールコツクに

以書翰申入候外國之船々我國近海通航之節其船破船およひ不得止之事ある時は格別何之謂れもなく開港場之外他之津港に(リ)猥に繫泊致すにおいてハ許多之不都合ハ勿論如何様之騷擾を可生哉も難斗掛念之至に付右様之儀無之様貴國人民に兼而相諭し(テ)おかるゝ様致度候拜具謹言

安政七申年正月廿八日(申正月廿九日)

協坂中務大輔(花押)

安藤對馬守(花押)

(8) ホーハタン船に多分之御引替有之候旨苦

情申出る書翰三通(西) 一月三〇日・二月八日・正月十七日

日・廿一日(一四・一八・二〇)、右御返翰(舊)

正月晦日(二十八)、附洋銀引替高書付

大貌利太尼亞全權兼コンシユルセ子(ナシ)ラー

エキセルレンシー

ルーセルフワールトアールコツクに

ホウハタン船に神奈川の運上所において壹分銀引替遣わ

せしことに(就キ)つき申越されたる第十四号十八号二十号之書

翰何れも落手披見せり早速其筋相糺せしにホウハタンに

多分の壹分銀引替遣わせし趣ハ知らるゝ通同船事ハ我國

使節迎之爲渡來せしものなれハ船中模様替等多分之入用

有之由彼船役人共申立且先般同船渡來之砌も引替之儀

付同國ミニストルより右乗組之者ともハ我國之爲力(のため)を致

すものなれハ別格之取扱あるへき旨申立し事も有之旁不

得已引替遣せし趣(に西)にて其引替高は別紙に書せること(和)くな

るよし申出たれハ能々事情諒察致さるへく將又亞墨利加

コンシユルに(而巳)のミ壹分銀引替遣し貴國コンシユルには引

替遣わさすとの儀は同人ことハコンシユル職務のミなら

ず兼而商賣をなすよしにてコンシユル館入用銀之外猶商

人の桁に準し引替方申出しにより其高自然余計相成しこ

とにて貴國コンシユルとて(ニ西)も館中入用の分ハ申出らるゝ

毎に必引替遣せしよし(強チ)あなから申立らるゝ通にもあらさ

る趣申立たりされハ其許聞込るゝ處ハ行違にハあらざる
(應)か猶糺察有之度存候尤荷馬買入之爲申立らるゝ引替銀之
(のめ)儀は早速神奈川に達し置たれハ馬買入方於てハ差支はあ
(おも)るましかれ共毎日五百トルラルと定むる取斗ハ爲し難し
(な)尤馬買入高に應し申立次第引替可差進間其段心得被置候
(以下存候迄六三才大)様存候尤右等ハホウハタン船出帆前に回報およふべき積
り精々取急ぐといへとも翻譯其外調方に時日を費しかく
遅延におよひしハ何共氣の毒に存候拜具謹言

安政七申年正月晦日
(年也)

脇坂中務大輔(花 押)

安藤對馬守(花 押)

〔同封文書―通信全覽二編英國往復御書翰四番〕

亞墨利加ホーハタン船神奈川港碇泊中船中諸入用并

乗組之者一同洋銀引替高書付

未十二月廿日

申正月九日迄

一 ドルラル三万五千八百七十七枚

此壹分銀十壹万五千五百七十七余

外国事務老中書翰

申正月十日差出 〔通信全覽二編英國往復御書翰四番〕

第十四号

不列顛殿下の全權兼日本在留のコンシユルセ子

ラール、リュツテルホルドアールコック

外国事務宰相台下に呈す

千八百六十年第一月三十日江戸の不列顛コンシ

ユラートゼ子ラール館に而

神奈川にて毎日荷馬買入の法則に就て既に台下と議せし
法則并近頃外國奉行堀織部正と相議せし處置によれハマ
ヨールデホンブラング子直に馬代を拂ふ爲めに不列顛政
府に於て損亡なからんには横濱の金庫に適量の日本貨幣
を得んことハ切要なり但し洋銀を以て拂ふ時は此銀價三
分より下直なるか故なり○故にブランク子より嘗て予に
此事を記し示したり蓋毎日荷馬を鬻キ來るを遲滞なく決
着して買取り其職務を誤つ事なからんが爲めなり
台下より本月八日に送れる書中に神奈川におゐて毎日僅
に壹分銀一万斤を限りて取替へ此銀を不同なく諸國に分
チ與ふる事を記せり○日本政府に於て此限りたる銀量よ

り多量を取替へ能わさる間は余此平均に分チ與ふる法を以て正理なりとす而して余に於てハ其配分の法嘗て意に應し且正直なりとハ爲さざりき○然れとも余いま其正直の法を忘られたる事を聞かす然るにホーハタン此前渡來之節并此度も故障なく大數のトルルを取替し事を余聞たりしに我國の商人は毎日拒まれ或は僅ニ取替へ得る而已又亞國のコンシユルは此節日毎に一千の洋銀を取替へ不列顛のコンシユルは一斤の壹分銀をも得る事能わす此事件は日本より一言も辯すへからざる事なり而して又本月第八日の書翰に偏頗なく平均に配分せりといへる意と齟齬せり且予其書中に因て考ふるに台下外人定則の要件に關ハらず正理ならざる配當ニ付余か問ひたる事を推量せられたるならん何事も虚偽なしと思ひ給ふへけれども他國の人民は多分の銀量を取替へ不列顛にはコンシユルも商客も僅に一分銀を得る事能わす是故に他國の害に及ふといへとも此不正なる處置の續けるに於ては余自ら嚴にこれを論せざる事を得ざるなり

今通商する諸國の商客各々皆同様の免許あらざるハなし

○配分し給ふべき一分銀の全量十分ならざる間は假令大に商賣する國と又僅に商賣する國とにて實に其要する處相同しからずといへとも十分平等になし給ふを以て恐くは最善良の事なるへし

然れとも官吏の貨幣を要するは全く右に異なり別に己が自用の爲めにするにあらず或は貿易を爲すにあらず其政府の用に供する爲めに要するものなれハなり○右の兩般の場合に於て明亮なる別あり○若し官吏兩般の事をなし之を委しくいへば右官吏は公用を務め兼て同時に貿易を爲すものなれハ其貿易の便に於ては諸商人に許さるゝ者を超へ他に絶へて免許あらざるなり幸にして日本在留ハ一レマリーイエステイトの官吏に關ハるものは一人も假令民間の物或は海に要する物或は兵科に屬する物といへとも貿易する免許絶へて無キなり今官吏の要する貨幣の交換は其處置至要の費或は他の公然たる國用或は切要なるものゝ爲めなり○此の如キ費用の爲メにする時は絶へて定限せる分界を立つべからず

其費時としてハ大時としてハ小なり

然れとも常に日本政府右扶助をなす事を拒ミ能ハすとす
就中日本政府トルラルを一分三箇として通用せしむる爲
めに極印し自由^ニに人ミの手を超へて右の相場ニて開港の
所に及び總て日本國內に環流せしむるに至る迄ハ右の扶
助をなし給ふべし○コンシユル即全權使節の印符ニ而斯
く云ひたる我政府の用に要するの日本政府を日本金役所
より與へらるべし但其貨幣右の金役所よりしてのミ出^{マツ}て
得べしとすマヨールホンブラングの請に付而は日ミ要す
る金高ハ其買ふ處の馬の數及び其馬のために要すへき費
に關係するは自然の理なり故に爰に豫め其金高を定むべ
からず

然れとも暫くの間は少しくも毎日五百トルラルにて彼が
買ふ處のものミ爲には十分なるへし而して彼に右金數を
與ふる爲めに直に一二の法則を立らるべし

台下若し一時にトルラルに極印し之を一分銀三箇として
通用せしめハマヨールホンブラング台下を煩わす事を要
せざるべし○然れとも台下若し之を爲さるれハ余台下に
請ふ日ミ五百トルラル丈の代りの一分銀を横濱に於て右

マヨールの用に充るの命令を下し給わらんことを但其入
費はマヨール其政府の用に供するに用ふべきにて余も之
に應じて要する所の請ひたるなり決して少しも貿易の爲
めにあらず恐惶敬白

日本在留のブリタニヤ全權兼コンシユルゼ

子ラー

リュテルホルトアールコック 手記

ブリタニヤワイスコシユル

エル ユースデン 正譯

外國事務宰相台下に呈す

申正月十八日差出〔通信全覽二編英國往復御書翰四番〕

第十八号

日本在留ハレブリタニヤマリーエステイトの
全權兼コンシユルゼ子ラー、ルーセルホール
トアールコック

外國事務宰相台下に呈す

千八百六十年第二月八日江戸ブリタニヤコン

シュルゼ子ラール館ニ而

横濱に在る我國の商人數と愁訴して言へらく運上所ニ而毎日實に些少なる十トルラルの外は引替を拒ミて交易の爲めの便宜は悉く之を妨けられ然るに亞米利加軍艦ホーハタンの士官ハ此人固り商人にあらず又其政府より交易を爲すを禁せられたるなり反て日と夥しき壹分銀を受取りたりと是其交易を爲すためにして其船の供用の爲メにあらざるは人の知る所なり此事若し實ならハ甚敷偏頗にして條約に取極めし寛典に背くか故に堪へ忍ふへからざる事体なり○故に余台下に予か只今受取たる報告は證據すへき事なるや又精密なるや否ざるやを直チに之を明白に告給わん事を懇請す是れ余ブリタニヤ臣民の得へき寛典と切要を保護せんか爲め別法を設くるを要するやを熟考せんが爲めなり近頃ホーハタンの士官壹人壹分銀三万箇を得又壹人は一万五千を得たり此貳人の外勘定役の者も亦夥しき數の壹分銀を得且其數の違ひ有りといへとも總て士官は悉く商人の得る處に比すれハ格外に多くの壹分銀を得たる由を告たるものあり

又云らく今神奈川港内に在るコル子リヤウルベハンと号せる船ホーハタン^{号船}の士官香港に送るため積荷せしよしハ人との知る所なりと又亞米利加の新ヒルマ(仲間)ハ一の廻狀を廻せしよしロイテナント^{名官}ハベサン^{名人}は則其首魁たり○此終りに擧る箇條は余台下の之を證せん事を請わす又台下恐らくハ之を知らざるべし然れとも此事は他の箇條の實説たる證明するに足る而已○余か請ふ所の事及び余か希ふへき當然の理ありと思ふ事は台下時日を過さす速にホーハタン入港以來幾許のトルラルを引替たるやを告知らせ給ふべし是レ日本政府亞米利加軍艦の士官ニは多數の壹分銀を與へ然るに交易の爲メ引替の方法を拒ミ日本政府の處置により我國の臣民彼等か訴へ告ぐる如く幾許の損害を受しやを辨察せんが爲なり恐惶敬白

日本在留ハーレブリタニヤマリーエステイ

トの全權兼コンシュルゼ子ラール

ルーセルホールトアールコック 手記

ハーレブリタニヤ現任ワイスコンシユル

エル ユースデン 正譯

外國事務宰相台下に呈す

申正月廿日差出〔通信全覽二編英國往復御書翰四番〕

第二十号

日本在留ハレブリタニヤマリーエステイトの

全權兼コンシユルゼ子ラール、ルーセルホール

トアールコック

外國事務宰相台下に呈す

千八百六十年第二月十一日江戸のブリタニヤコ

ンシユルゼ子ラール館ニ而

余一昨日台下にホーハタンの士官に渡されし壹分銀の總

額を記載せられん事を願ひて一書を贈りたり^(改行)然るに其

時限十分なりしといへとも余いまた其回答を得ざりし

余今又台下に書を贈りて右の回答を延期する事なく且ホ

ーハタンの出帆前に請求するハ余か職務なるを告知せん
とす

此の如キ場合に於て延期する事ハ一個の拒ミをなすに均
しく余は其拒ミを以て是迄總て執訴せしことと余か神奈

外國事務老中書翰

川より得たる愁訴の眞實なるを徴するものと思ひ做すへ
し是を以余台下に堪忍に際限有る事を證し又此の如く著
しき條約の違犯および信義を破る事ハ後必ず災害を起さ
ん事を台下ニ證するの法則を設けんとす恐惶敬白

日本在留ハレブリタニヤマリーエステイ

トの全權兼コンシユルゼ子ラール

ルーセルホールトアールコック 手記

ハレブリタニヤマリーエステイトのワイ

スコンシユル

エル ユースデン 正譯

外國事務宰相台下に

(9) 御國商人より鐵砲買入之儀ニ付差出候書

翰^(西一月一五日) 舊十二月晦日(七)、右御返翰^(西二月二日) 舊三月二八日

〔廿九〕

^(ナシ)
大貌利太尼亞全權兼ミニストル^(コンシユルゼ子ラール)

エキセルレンシー

ルーセルフワールトアールコックに

貴國第一月十五日附第七号之書翰落手披見せり神奈川に
おゐて我國の商民外國人より鐵炮を買求め度旨申出し趣
厚意を以て申越さるゝ段委細領承せり右はいわるゝこと
く兩國條約に關係する一事たれハ早速其筋を糺せしに條
約之儀は兼てより國內に觸示せしといへとも猶不案内の
族ありて其頃鐵炮舶來の有無且買入の手續等を商人を以
聞合せし者有之由なれ共全買入方を談判せし事にハあら
ざる趣なれハ深く心配せらるゝまでにハおよふまし其段
返書如此候拜具謹言

安政七申年二月二日

脇坂中務大輔(花押)

安藤對馬守(花押)

未十二月廿二日差出〔通信全覽初編英國往復御書簡八十九番〕

第七号

千八百六十年第一月十五日江戸ブリタニヤコン

シュルゼ子ラール館にて

日本在留ハールブリタニヤマリーエステイトの
全權兼コンシュルゼ子ラール、ルーセルホール
トアールコック

外國事務宰相台下に呈す

昨晚(通)神奈川の告文を得たりしに昨日一昨日の間横濱
にて或る日本人不意に我國の商人に鐵炮を買ひ求めん事
を望みたる由を述たり

此事は唯日本の法律に背ける而已ならず從來未曾有之事
なる故に大に混雜を起したり余少しも時刻を失ふ事なく
此事を台下に上告し且ッ台下此變事を明解し其道理を述
へ給ふやを問ふ恐惶敬白

日本在留の全權兼コンシュルゼ子ラール

ルーセルホールトアールコック 手記

エフ ブレッキマン 正譯

(10)

國書差出方之義ニ付御逢願出ル書翰(西舊)

二月二日 正月晦日(二三) 右御返翰(西舊) 二月二日

〔卅〕并再返翰（西二月二四日）〔二四〕
（舊）二月三日

（ナシ）
大貌利太尼亞全權兼ミニストル

エキセルレンシー

ルーセルフワールトアールコックに

貴國第二月廿一日附二十三号之書翰落手披見せり今般其許ミニストルに昇進せらるゝによりて書翰被差出方等之儀其他緊要之事件も有之ぬれハ余に接遇せんことを請はるゝ條具に領承せり然るに貴方第二月廿四日は此方差支ゆる事あれハ我二月六日八時に代へんことを望みぬ尤脇坂中務大輔宅へ被相越候様存候其余之事は猶可申入候得共差急（キの）きし事故先此段答書旁申入候拜具謹言（ナシ）

安政七申年二月二日
（年中）

脇坂中務大輔（花 押）

安藤對馬守（花 押）

申二月朔日差出 〔通信全覽二編英國往復御書翰九番〕

第二十三号

ハーレブリタニヤマリーエステイトのボイテン

外国事務老中書翰

ガオー子アフゲサント」（特派公使之義）兼全權ミニストル
官名ルーセルホールトアールコック

外国事務宰相台下に呈す

千八百六十年第二月廿一日江戸のブリタニヤ使

臣館ニ而

余謹て啓す予日本在留のハーレマリーエステイトのボイテンガオー子アフゲサント兼全權ミニストルに任せる委任狀と此事を

大君に奉告する我國女王の手書を落手したり

大君に於て此手書ニ而余か此身分たるを信し給べし此書は余御直に呈上すへき旨を命せられたり

此事并他の極緊要の事件に就て台下に面謁せんは已むへからざる事なり是以余本月廿四日午後一時のころ候間せんとす台下此時日に余に接遇せんことを請ふ恐惶敬白

ハーレブリタニヤマリーエステイトの特派

公使兼全權ミニストル

ルーセルホールトアールコック 手記

エル ユースデン 正譯

外國事務宰相台下に呈す

申二月三日差出〔通信全覽二編英國往復御書翰九番〕

第二十四号

格外公使全權ミニストル、ルーセルホールトア

ールコック

外國事務宰相台下に呈す

千八百六十年第二月二十四日江戸のブリタニヤ

使臣館ニ而

昨日台下より賜りたる公書の返翰として余謹て台下ニ左

件を報告す台下今日は余を待遇する事不都合なる由なれ

ハ余來ル月曜日即貴國の二月六日二時頃に脇坂中務大輔

台下の館第に伺候すべし是來示に従ふ處なり恐惶敬白

日本在留ハレマイイエステイトの格外公

使全權ミニストル

ルーセルホールトアールコック 手記

リカールド ユースデン 正譯

外國事務宰相台下に

(11)

御逢之儀ニ付被差遣候御書翰(舊二月十六日)(三十二)、但返翰無之

貌利太尼亞格外公使全權ミニストル

エキセルレンシー

ルーセルフアールトアールコックに

以書翰申入候我本月十四日外國事務奉行に申聞られし如く明後十八日八時中務大輔宅におゐて面接及べく此段申入(度)(チシ)候 拜具謹言

(年申)

安政七申年二月十六日

脇坂中務大輔(花押)

安藤對馬守(花押)

(12)

附添人之義ニ付佛公使ヨリ之書翰(舊十二月二十九日)添差出候書翰(舊正月十五日)、右御

返翰(舊二月廿七日)(三十四)

貌利太尼亞格外公使全權ミニストル

— 30 —

エキセルレンシー

ルーセルフワールトアールコックに

貴國第二月六日附第十七号之書翰落手披見せり其許并附
屬の人ニ對し我國人民兎角ニ不都合の事あるハ全く末
と輕輩の習俗より生ずる処にして嚴敷沙汰およふといへ
とも未だ全く阻止するにいたらざるにより殊に我心を苦
しめぬれハ當分之内遊歩之節等も我國の吏士に從衛せし
め右等の患なき様爲取扱度段度と申入るゝにより其許存
意之趣并佛蘭西コンシユルセ子ラールより其許に贈られ
し書翰之写を添へ從衛之吏士共是迄之振舞不亘段品と申
越されし趣委細領承せり元來外國人從衛之ため附添しむ
るものなれハいはるゝことき取扱ありてハ其許之煩をま
すのミならず我政府懇篤之主意にも背くゆへんなれハ尙
令を其筋に下し我等之旨意徹底し其許の不都合にもおよ
はざる様釐正すへきにより外國事務奉行より能く其許ニ
照會せしめんとす將又我國におゐて士官を雇入れ度と
の儀ハ先般以書翰答およひしことと俸祿ある士人各其職
務あれハ求に應すへきもの無し他の士人の官府の仕藉に

外國事務老中書翰

あらざるものを雇入可然旨申入置し通りにて承引いたさ
れなハ抱入方も相成へし尤其國許より護衛の兵士呼寄ら
れんことハ恐くハ兩國和親の主旨に障り且其許平生懇切
之情に違は斷り及びぬ依右答書如斯候拜具謹言

安政七年二月廿七日

協坂中務大輔(花押)

安藤對馬守(花押)

申正月十六日差越〔通信全覽二編英國往復御書翰五番〕

日本在留ハレブリタニヤマリーユステイトの

全權兼コンシユルセ子ラール、ルーセルホール

ドアールコック

外國事務宰相台下に呈す

千八百六十年第二月六日江戸のブリタニヤコン

シユルセ子ラール館ニ而

第一月十七日及廿二日附の台下の書翰の報答と又台下の
江戸在留の外國名代人に衛護のため役人を附添ふへしと
の再三の請求の答の爲に余此事件ニ付て近日フランスの

コンシユルゼ子ラルより余に送れる書翰の翻譯を謹て
台下に送る余は全くエルエーデルホーグボーレンヘー
ル語^敬デベレクル^名人の説に同意す○役人其職を務むるに尊
敬を缺くと不正とを顯す事余は迄自ら實驗する處全くベ
レクル君の實驗する所と符合せり○若此殊件に就て十分
變革を爲さざれば其役人は決して眞の守護にあらざるべ
し○然るに外國の名代に附添の士人右名代と同意同等の
日本人には謹慎して恭敬を表すれとも外邦人には其恭敬
を僥略にせり如此士人と同行する時は益々外國の名代を
賤むの理なるべし

斯の如き行狀は人民特に諸大名の家來に不敬不禮粗暴を
なすを勸む此惡しき所行は大抵其人民家來より始るなり
然れとも既に示せる諸策中此策を以て最良の策とし我等
之を採用せん事台下常ニ求むる所なるを察せり故に余我
同職たる亞米利加及び佛蘭西の名代と右の事を商議した
り○余右の人々悲歎すべき事の生ずるを避け之を防ぐ志
願の誠實なるを誠に緊要なる預定にて台下の説を遵用せ
んと欲するの意を知る○フランスの名代エルエーデルホ

ーグゲホーレン^敬語デベレクル右の事に就てハ既ニ台下及外
國奉行と委しく談判したり故に此事件亞國ミニストル及
ひ余もフランス名代に委ね以て更に其事に就キ台下と議
し且其預定如何なるやを我等連名にて告ぐへしと任せり
本月四日^正月全口上ニ而外國奉行堀織部正松平石見守に
其預定の大略を告げたり

此事に就てハ我等の十分の所置を煩ハす事なく不敬不礼
台下の希望する如く受る事なきに至り果して其功績^續預定
する所に應ずる時ハ我等におひて甚た愉快なるべし○然
れとも若し其効なく尙不敬不礼の事あらは既に余か建る
所の二策の一を行ふの外他術なかるへし即其一是各國の
名代兵器を裝ふたる自國の兵卒を從へ守護せしむるなり
又其一ハ右の目代自己の費を出し諸人尊敬を以て待遇す
へき威權ある日本人を備へ置へきなり

日本在留のハレブリタニヤマミーエステ
イトの全權兼コンシユルゼ子ラル

ルーセルホールドアルコック 手記

ハレブリタニヤマミーエステイトのワイ

スコンシユル

外國事務宰相台下に呈す

エル ユースデン 正譯

前書ニ添差出

佛蘭西のコンシユルセ子ラルよりセイ子エキセルレンシ

ーアールコックに贈れる書翰和蘭譯

千八百六十年第一月二十日江戸の佛蘭西コンシユルセ

子ラル館ニ而

尊敬すヘキミニストル

余日本政府より足下に贈れる足下の他行の節役人を従へる事を述へたる報告を落手せり○足下余か吾等に附添ひたる役人の常見番を毎に否ミたる事を知る是其故は諸民の正理條約及び使節の式法に反するを以てなり○若し日本の政府實に我等の力に成るべき衛護者を我等に附添んと思へるならハ先ッ我等望む所の仕方を商議せざるを得ず○然るに其事非ずして只彼役人我等の諸事に就キ煩ひを爲す故に之を否ミ拒まざる事を得ず○是よりしてハ如何様の事件起るやハ足下も又余か如く能く知る處なり○余か館内には役人凡十五人居留すれとも何の爲にそれ程居るや余實に知る事なし其故は唯其二三人のミ而濟むを以てなり

外國事務老中書翰

○余か注目する處を以てすれハ彼レ余か要する所の物を下直に得せしめす却て高直ならしむ○然れとも余堪忍して之か改革を要するを待ッ○其我を導くものゝ事に就てハ余歩行の時もまた乘輿の時も役人を用ひたり○余か得ヘキ尊敬を守る爲め彼か行ひ正確ならざる故に余を敬するの理甚少なきを知れり○曾て余其三人を従へて東海道に行きし時余か大名の士官等に無礼を受けしに彼一言も言ひ出さずして許したり是彼か其爲に驚きし事を余實に信す其以來余復彼に信任する事甚た少し○余此事に就ては愁訴する事なかりし是彼か罰せられん事を恐れたれハなり然れとも余其時彼か爲には甚た心配するに及ばざる事を知りたり○若し足下及びエルエーデルホーグゲホーレン^敬ハルリス外國事務宰相の右の説を採用せば余もまた之に同意すへけれども余唯余に勤仕する役人の礼ありて國內の貴人に勤むるか如く奉仕せる約定を以てのミ之行ふべし然らざれハ其役人ハ益あるより反て煩わしかるべし尊敬すヘキミニストル足下に甚た謙遜せる臣なる余が大恭敬及び懇篤なる説の證據を受用せられよ

ハーレブリタニヤマリーエステイトの現任ワイ
スコンシユル

ドセンドベレクル 手記

エル ユースデン 正譯